

感情表現を伝えるテキストメッセージの特徴に関する研究

石川 真*

(平成23年9月30日受付;平成23年11月2日受理)

要 旨

本研究は、携帯電話を用いたテキストメッセージによるコミュニケーション場面において、喜怒哀楽という感情表現に対する送り手と受け手の認知の特徴を明らかにすることを目的とした。とりわけ、社会的スキルの違いがメッセージ内容の理解や相手の存在感の認知に及ぼす影響に着目し、調査研究を通して検証した。

社会的スキルについては、因子分析により得られた3つの下位概念のスキルも対象として分析した。はじめに、受け手として相手のメッセージ内容の理解について検証したところ、社会的スキルおよび下位概念の問題解決・意思決定スキルにおいてスキルの高い者の方が低い者よりもメッセージを理解している傾向が示された。一方、感情表現の特徴は、喜びや楽しさの感情表現の方が怒りや悲しみの感情表現よりも理解している傾向が示された。続いて、送ったメッセージを相手にどの程度理解されているかについて検証したところ、社会的スキルおよび下位概念のスキルの違いに差は見られなかった。一方、感情表現の特徴は、受け手の場合と類似した傾向が示された。

さらに、相手のメッセージを受け取った時、および相手にメッセージを書いている時の2場面の相手の存在感について、社会的スキルおよび3つの下位概念のスキルの違いに着目し分析を行ったところ、スキルの違いに関わらず、喜びや楽しさの感情の時のほうが、悲しみや怒りの感情の時よりも相手の存在が強いという傾向が示された。

KEY WORDS

テキストメッセージ text message

社会的スキル social skill

社会的存在感 social presence

1. はじめに

情報通信技術 (ICT: Information and Communication Technology) の発展は、コミュニケーション行動に多大な影響を及ぼしている。たとえば、総務省 (2011) では、2005年と2010年のコミュニケーション行動の調査結果を比較して、音声コミュニケーション (電話による通話) からネットを介したコミュニケーション (メールの読み書き、サイトの閲覧・書き込み) へ利用時間がシフトしている傾向が指摘されている。とりわけ、多様なコミュニケーションサービスの中でもメールの利用が最も多い傾向を示している。また、若年層を中心に、対面コミュニケーションよりもネットを介したコミュニケーションの方が好まれる傾向についても指摘している。一方、小林ら (2007) が2005年に実施した調査でも、携帯電話でのメール利用率が95.5%であったことが報告されており、メールは日常的なコミュニケーション形態として位置づけることができる。

ところで、メールをはじめ、テキスト (文字) でメッセージの交換が行われるネット上のコミュニケーション (CMC: Computer Mediated Communication) は、相手に伝わる非言語的な情報の欠落や相手の存在 (社会的存在感) が希薄となり、フレーミングと呼ばれる他者への誹謗中傷や攻撃行為を引き起こす問題が指摘されている (Sproull and Kiesler, 1991)。学校現場でもこうしたネット上のさまざまな問題への対応の指摘がなされ、2008年3月に告示された小学校学習指導要領においては、情報モラル教育の充実が図られている。教育現場では、たとえば、若月・石川 (2006) はネット上の問題回避をネットワークコミュニケーション能力の育成によって解決する取り組みを行っている。また、文部科学省国立教育政策研究所は、2011年3月に小・中学校において教師が情報モラル教育を無理なく確実に実践できるように「情報モラル教育実践ガイダンス」を作成・配布するなど、情報モラルは関心の高いテーマとなっている。

このような状況において、メールを用いてより円滑なコミュニケーションを実現するために、石川・平田 (2008) は相手の存在感 (社会的存在感) に着目している。そして、基本的なメールの送受信場面において、受け手の状態の

時には相手の存在をより強く意識しているのに対し、送り手の状態では相手の存在の意識は低くなる特徴があることを明らかとした。これらの結果はメッセージ内容については言及しておらず、コミュニケーション全般の傾向を示していると考えられるが、たとえば、伝達しづらい感情表現であっても同じような傾向が示されるか検証していく必要があると考えられる。

一方、石川 (2011) は、テキストメッセージを用いたコミュニケーションにおいて「受け手」と「送り手」に着目し、快、不快という感情表現の理解が社会的スキルや性別により、どのような傾向が見られるかを検証している。その結果、伝達するメッセージが快表現の場合においては、社会的スキルの低い者が高い者よりも相手のメッセージを理解している傾向が示された。一方、不快表現においては、社会的スキルの低い者において、受け手の時が送り手の時よりも理解の程度が高い傾向が示された。しかし、石川 (2011) が言及している通り、快、不快という表現に止まらず、具体的な感情表現や感情を伴わない表現内容における特徴についても探る必要がある。

そこで、本研究では携帯電話を用いたテキストメッセージによるコミュニケーション場面において、喜怒哀楽という感情表現に対する送り手と受け手の認知の特徴を明らかとすることを目的とする。とりわけ、社会的スキルの違いがメッセージ内容の理解や相手の存在感の認知に及ぼす影響に着目して検証する。

2. 方 法

2.1 対象者・実施時期

18～27歳の情報教育に関わる講義科目の受講者である学部生、大学院生176名（男79名、女97名）を対象とした。授業時間内に質問紙を用いた調査を20分の回答時間を設け、実施した。

2.2 質問紙

調査項目は、菊池 (1988) の社会的スキル測定尺度 (KiSS-18)、および携帯電話でのメール利用に関する内容で構成した。質問紙のデータの取り扱いについては個人情報の漏洩のないよう対応する旨を明記し、フェイスシートには学籍番号、性別、年齢のみを記載させた。

携帯電話でのメール利用に関する調査では、日頃やり取りのある任意の相手（質問紙上ではAさんと表記）を1名抽出させ回答を求めた。受け手の立場においては『Aさんからの下記の感情表現や快・不快表現が含まれるメッセージをあなたはどの程度正確に理解していると思いますか?』、送り手の立場においては『あなたがAさんへ送る下記の感情表現や快・不快表現が含まれるメッセージは、Aさんにどの程度正確に理解されていると思いますか?』と記した。感情表現は、『喜びを伝える表現』、『怒りを伝える表現』、『悲しみを伝える表現』、『楽しさを伝える表現』の4項目、快・不快表現には『快い表現』、『不快な表現』の2項目を採用し、7件法で理解の程度を回答させた。その他、受け手および送り手双方の立場における各表現のメッセージのやり取りの頻度についても同様に回答させた。

さらに、メッセージを受け取った場面と書く場面を設定し、上述した4種類の感情表現を一対比較した場合、どちらの方がより『相手の姿や表情を思い浮かべるか』について4件法により回答させた。なお、快・不快表現に関する項目、および頻度の項目については今回の分析対象から外した。

3. 結果および考察

3.1 社会的スキルの信頼性と因子構造

はじめに、社会的スキルの18項目について合計点を求めたところ、平均値は58.51だった (SD=8.80)。また、信頼性係数 (クロンバックの α 係数) は $\alpha = .85$ であり、菊池 (2004) で紹介された複数の調査結果とほぼ同様の結果が示された。社会的スキルの違いに着目し分析するため、平均値以上の者をSS上位群、平均値未満の者をSS下位群とし、社会的スキル要因とした。

続いて、社会的スキルの下位概念を明らかにするために、18項目による因子分析 (最尤法、適合度指標 (AIC) に基づき5因子を抽出、バリマックス回転) を行った。その結果、第5因子までの累積寄与率は45.29%だった (表1)。各因子の負荷量が高い項目内容を踏まえ、第1因子は問題処理スキル因子、第2因子は問題解決・意思決定スキル因子、第3因子はコミュニケーションスキル因子、第4因子は対人関係スキル因子、第5因子は批判的思考スキル因子と命名した。従来の研究では、たとえば篠原・三浦 (1999) が「一般マネジメントスキル」「コミュニケーションスキル」「対人ストレススキル」の3因子を抽出、千葉・相川 (2000) が「言語的相互作用スキル」「感情処理スキル」「計画スキル」「对人的配慮スキル」「協調性スキル」の5因子を抽出する因子構造の結果を示している。今

回の結果と照合すると、第1因子（問題処理スキル因子）にはマネージメント、対人ストレス、感情処理などの要素が含まれている。第2因子（問題解決・意思決定スキル）にはマネージメントや計画などの要素、第3因子（コミュニケーションスキル因子）にはコミュニケーションの他、感情処理の要素などが含まれていると考えられる。

今回抽出された5因子は社会的スキルの下位概念の能力と位置づけられるが、固有値が1.0以上であった上位3因子に焦点を当て、その特徴を探ることとした。因子得点を基にして、因子ごとに0以上を上位群、0未満を下位群とし、各社会的スキル下位概念の要因とした。

表1 社会的スキル (KISS-18) の因子構造

項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	共通性
6. まわりの人たちとの間でトラブルが起きて も、それを上手に処理できますか	.818	.256	.241	.095	-.209	.845
7. 怖さや恐ろしさを感じたときに、それをう まく処理できますか	.627	.108	.098	.128	.254	.496
14. あちこちから矛盾した話が伝わってき ても、うまく処理できますか	.581	.146	-.029	.044	.213	.408
11. 相手から非難されたときにも、それをうま く片付けることができますか	.569	.042	.028	.384	.081	.480
4. 相手が怒っているときに、うまくなだめ ることができますか	.419	.350	.079	.079	.071	.316
3. 他人を助けることを、上手にできますか	.266	.758	.061	.009	.091	.658
2. 他人にやってもらいたいことを、うまく指 示することができますか	.200	.610	.163	.159	.063	.467
9. 仕事をするときに、何をどうやったらよ いか決められますか	.235	.388	.001	.328	.335	.426
18. 仕事の目標を立てるのに、あまり困難を感 じない方ですか	.245	.379	.200	.090	.201	.292
1. 他人と話していて、あまり会話が途切れ ない方ですか	.216	.366	.283	.279	-.203	.380
16. 何か失敗したときに、すぐに謝るこ とができますか	.013	.255	.089	.088	.096	.090
5. 知らない人でも、すぐに会話が始め られますか	.119	.027	.970	.039	-.035	.958
15. 初対面の人に、自己紹介が上手に できますか	.079	.213	.557	.213	.058	.410
13. 自分の感情や気持ちを、素直に表現 できますか	-.062	.245	.260	.090	.067	.144
17. まわりの人たちが自分とは違った考 えをもっていても、うまくやってい けますか	.175	.229	.249	-.006	.068	.150
10. 他人が話しているところに、気軽 に参加できますか	.093	.400	.417	.588	-.134	.707
8. 気まずいことがあった相手と、上 手に和解できますか	.280	.086	.123	.396	.098	.267
12. 仕事の上で、どこに問題があるの かすぐに見つけることができます か	.315	.308	.060	.009	.678	.658
寄与率	13.41%	11.58%	10.04%	5.37%	4.90%	

3.2 受け手としてのテキストメッセージの理解

はじめに、受け手として相手のテキストメッセージをどの程度理解しているかについて分析した。社会的スキル要因 (SS上位群, SS下位群) と感情表現要因 (喜び, 怒り, 悲しみ, 楽しさの4条件) の2要因分散分析を行ったところ、双方の主効果が有意であった (社会的スキル要因 $F(1,175)=5.54, p<.05$ / 感情表現要因 $F(3,525)=40.90, p<.05$)。社会的スキル要因では、SS上位群の方がSS下位群よりもより相手のメッセージを理解していることが示さ

れた。一方、感情表現要因においてHolm法による多重比較を行ったところ、すべての表現間において有意差が見られた ($p < .05$) (図1 (a)参照)。

続いて、社会的スキルの下位概念のうち、上位3因子を対象とし、受け手として相手のテキストメッセージをどの程度理解しているかについて分析した。第1因子の問題処理スキル要因(上位群, 下位群)と感情表現要因の2要因分散分析を行ったところ、交互作用が有意だった ($F(3, 525) = 39.62, p < .01$)。上位群における感情表現要因の単純主効果の検定および下位群における感情表現要因の単純主効果の検定を行ったところ、いずれも有意であった ($p < .01$)。Holm法による多重比較を行った結果、問題処理スキルの上位群では、喜びと楽しさの表現間、および、怒りと悲しみの表現間を除いて有意差が示され ($p < .05$)、問題処理スキルの下位群では、喜び、楽しさの表現間を除いて有意差が示された ($p < .05$) (図1 (b)参照)。

第2因子の問題解決・意思決定スキル要因(上位群, 下位群)と感情表現要因の2要因分散分析を行ったところ、双方の主効果が有意であり(問題解決・意思決定スキル要因 $F(1, 175) = 5.15, p < .05$ / 感情表現要因 $F(3, 525) = 40.89, p < .01$)、問題解決・意思決定スキル要因では、上位群の方が下位群よりも理解していることが示された。一方、感情表現要因において、Holm法による多重比較を行ったところ、すべての表現間で有意差が見られた ($p < .05$) (図1 (c)参照)。

第3因子のコミュニケーションスキル要因(上位群, 下位群)と感情表現要因の2要因分散分析を行ったところ、感情表現要因の主効果が有意であった ($F(3, 525) = 41.57, p < .01$)。Holm法による多重比較を行ったところ、すべての表現間で有意差が見られた ($p < .05$) (図1 (d)参照)。

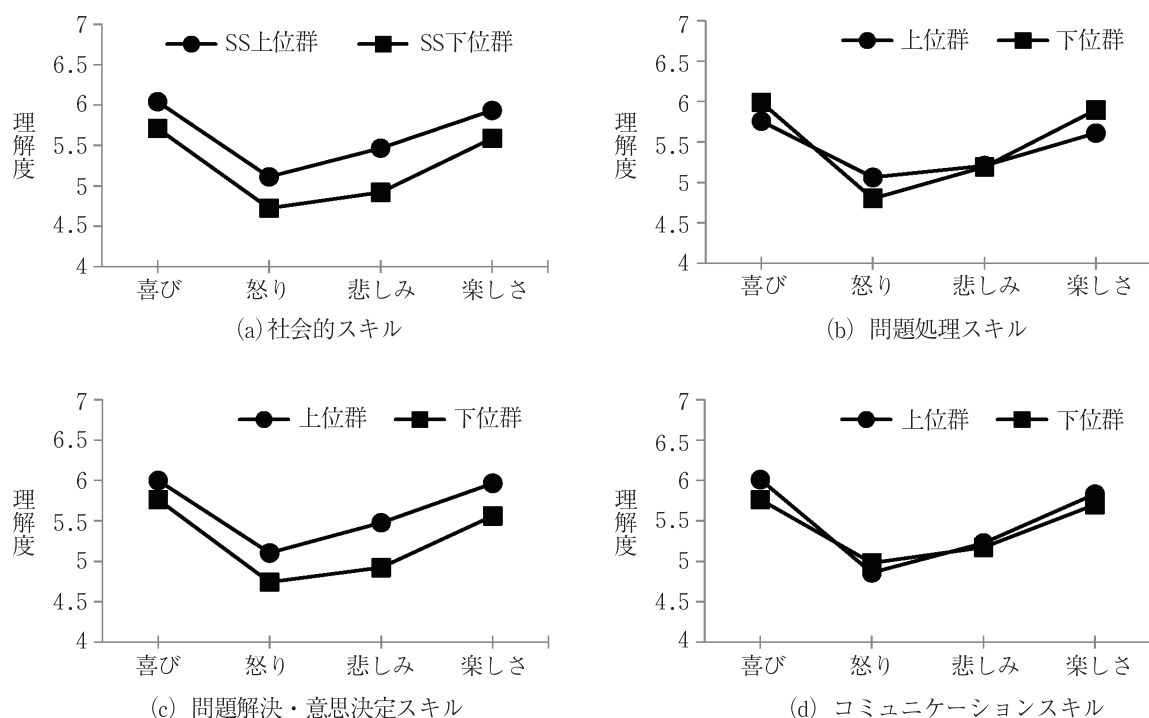


図1 社会的スキルの違いによる受け手としての感情表現の理解度の特徴
(数値が高いほど理解していることを示す)

社会的スキルの側面に着目すると、社会的スキルおよび下位概念の問題解決・意思決定スキルにおいて上位群の方が下位群よりも感情表現を理解している傾向が示された。日常生活で他者と円滑に相互作用したり、問題や課題に対して他者と解決していくためには、受け手として相手の伝えたいことを正確に理解する必要がある。そのためにはスキルを高めることが重要と考えられるが、今回の結果より、テキストメッセージであっても同様の重要性が示唆されたといえる。ただし、問題解決・意思決定スキルやコミュニケーションスキルにおいては上位群と下位群との差が示されておらず、すべてのスキル概念に同じ傾向が示されなかった。この要因については今後検証していく必要があると考えられる。

一方、感情表現に着目すると、ほぼ同様の傾向を示しており、すべての感情表現間に有意差が示された。この結果

について、喜びと楽しさをポジティブな感情表現、怒りと悲しみをネガティブな感情表現と分類すると、ポジティブな感情表現の方がネガティブな感情表現よりも理解している傾向が高いことが示された。個々の感情表現間にも有意差がある点、平均値がすべて中間値の4以上であることを踏まえると、全般的には理解されている傾向があるものの、その中でもポジティブな感情表現が理解されやすいと考えられる。その一方で、テキストメッセージによる怒りは他の感情表現よりも理解されにくい傾向を示しており、注目する必要があると考えられる。

3.3 送り手としてのコミュニケーション伝達力

送り手として相手に自分の書いたメッセージがどの程度理解されているかについて分析した。なお、ここでは、相手にいかに理解されやすいメッセージを書くことができるかという伝達力の認知と捉えることとした。はじめに、社会的スキル要因と感情表現要因の2要因分散分析を行ったところ、感情表現の主効果のみ有意であり($F(3,522) = 44.17, p < .05$)、Holm法による多重比較の結果、喜びと楽しさの表現間以外はすべて有意差が見られた($p < .05$) (図2 (a)参照)。

続いて、社会的スキルの下位概念のうち、上位3因子を対象とし、送り手として相手に自分の書いたメッセージがどの程度理解されているかについて分析した。第1因子の問題処理スキル要因(上位群, 下位群)と感情表現要因の2要因分散分析を行ったところ、感情表現の主効果のみ有意であった($F(3,522) = 43.18, p < .05$)。Holm法による多重比較を行ったところ、喜びと楽しさの表現間以外はすべて有意差が見られた($p < .05$) (図2 (b)参照)。

第2因子の問題解決・意思決定スキル要因(上位群, 下位群)と感情表現要因の2要因分散分析を行ったところ、感情表現の主効果のみ有意であった($F(3,522) = 44.15, p < .05$)。Holm法による多重比較を行ったところ、喜びと楽しさの表現間以外はすべて有意差が見られた($p < .05$) (図2 (c)参照)。

第3因子のコミュニケーションスキル要因(上位群, 下位群)と感情表現要因の2要因分散分析を行ったところ、感情表現の主効果のみが有意であった($F(3,525) = 44.48, p < .01$)。Holm法による多重比較を行ったところ、喜びと楽しさの表現間以外はすべて有意差が見られた($p < .05$) (図2 (d)参照)。

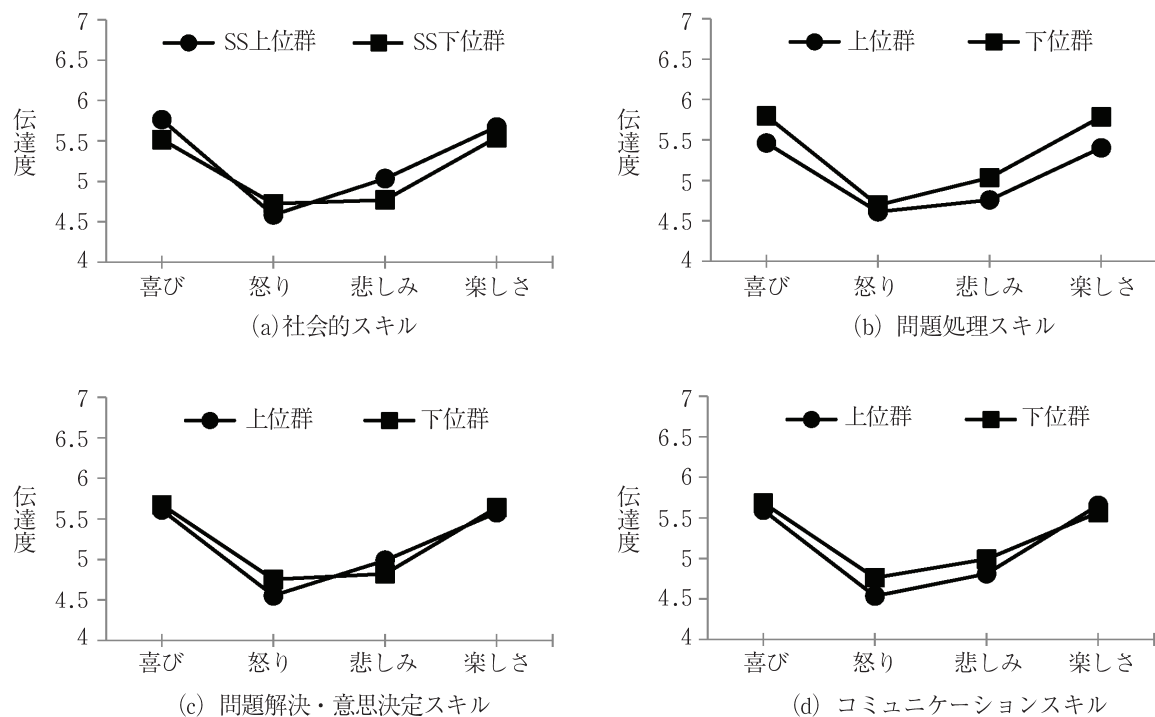


図2 社会的スキルの違いによる送り手としての感情表現の伝達能力の特徴
(数値が高いほど相手に理解されていると示す)

社会的スキルの側面においては、いずれも有意な傾向は示されなかった。全般的には、平均値がすべて中間値の4以上であることから、ある程度相手に伝わっている(理解されている)と認知していると考えられる。一方、感情表現に着目すると、喜びと楽しさの表現間以外はすべて有意差が示された。この結果は、ポジティブな感情表現(喜び

と楽しさ)がネガティブな感情表現(怒りと悲しみ)よりも正確に伝わりやすいと認知していると考えられる。また、社会的スキルの違いに関わらず、同様の傾向を示したということは、非同期型コミュニケーションにおいてネガティブな表現よりもポジティブな表現の方が正確に伝えやすい(相手に理解されやすい)傾向があると考えられる。

3.4 送受信に関わる相手の存在感

感情表現の送受信に関して、相手のメッセージを受け取った時、および相手にメッセージを書いている時の2場面の相手の存在感について分析を行った。社会的スキル要因のSS上位群、SS下位群、社会的スキルの下位概念である上位3因子(問題処理スキル因子、問題解決・意思決定スキル因子、コミュニケーションスキル因子)の各上位群、下位群ごとに、シェッフェの一対比較(中屋変法)により検証した(佐藤, 2008)。

はじめに、相手のメッセージを受け取った時について分析した結果、いずれも相手の存在感が最も高いのが喜びの表現であり、楽しさ、悲しみ、怒りの表現の順で存在感が低くなる傾向が示された(図3)。さらに、相互の差の検定(分散分析、多重比較にはヤードスティックによる信頼区間)を行った。その結果、いずれも分散分析の主効果が有意であり($p < .05$)、多重比較を行った結果、全てにおいて、喜びは怒りや悲しみよりも有意に相手の存在感が強く、楽しさも怒りや悲しみよりも有意に相手の存在感が強い傾向が示された($p < .05$)が、喜びと楽しさの表現間、怒りと悲しみの表現間には有意差がなかった($p > .10$)。

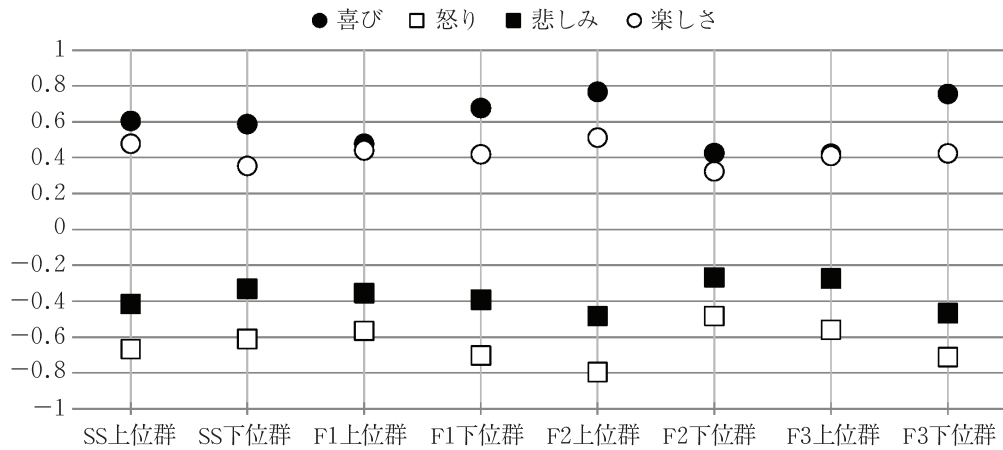


図3 受信時の社会的スキルおよび社会的スキルの下位概念(3因子)における相手の存在感
図内F1:第1因子, F2:第2因子, F3:第3因子を示す。

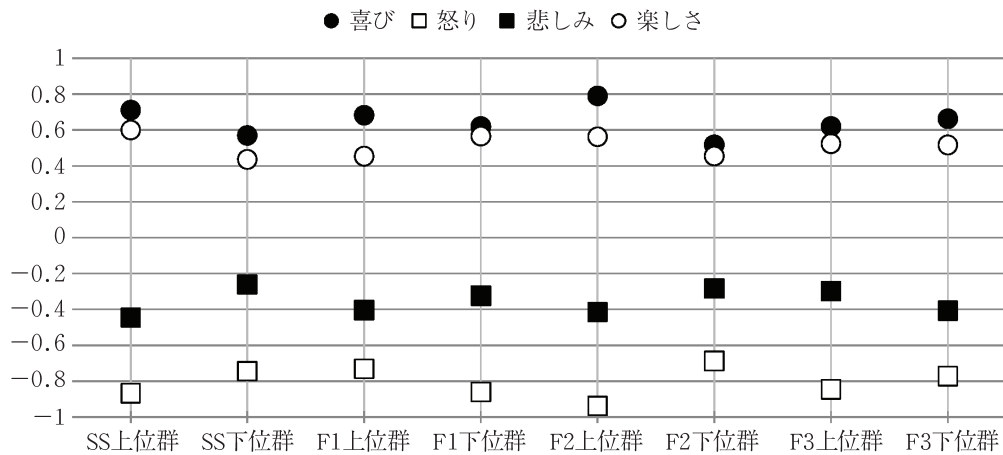


図4 送信時の社会的スキルおよび社会的スキルの下位概念(3因子)における相手の存在感
図内F1:第1因子, F2:第2因子, F3:第3因子を示す。

続いて、相手にメッセージを書いている時について分析したところ、いずれの群においても相手の存在感が最も高いのが喜びの表現であり、楽しさ、悲しみ、怒りの表現の順で存在感が低くなる傾向が示された(図4)。さらに、相互の差の検定(分散分析, 多重比較にはヤードスティックによる信頼区間)を行った。その結果, いずれも分散分析の主効果が有意であり($p < .05$), 多重比較を行った結果, 全てにおいて, 喜びは怒りや悲しみよりも有意に相手の存在感が強く, 楽しさについても怒りや悲しみよりも有意に相手の存在感が強い傾向が示された($p < .05$)。しかし, 喜びと楽しさの表現間, 怒りと悲しみの表現間には有意差がなかった($p > .10$)。

メッセージを受け取った時とメッセージを書いている時の2場面において, 相手の存在感に対する認知の傾向を探った結果, 社会的スキルの違いが相手の存在感の認知に及ぼす影響については明らかとされなかった。一方で, 今回取り上げた4つの感情表現に着目すると, ポジティブな感情表現(喜び, 楽しさ)とネガティブな感情表現(怒り, 悲しみ)の違いが相手の存在感の強さに影響を及ぼしている可能性が示された。石川・平田(2008)は, 基本的な送受信場面において, 送信時と受信時に相手の存在感の認知に違いがあることを明らかとした。そして, この違いの要因として, 受信時には「テキストメッセージという相手からの情報に接している」のに対し, 送信時には「情報が切り離されてしまう状態」であるためと推測している。この推測を参考に, 今回の結果を検証することとした。感情は快, 不快の次元で捉えることが多いが(たとえば, Russell and Bullock, 1985; Schlosberg, 1954), Smith and Ellsworth(1985)は, ポジティブな感情を「快」, ネガティブな感情を「不快」に分類している。ポジティブな感情表現は「快」で接近傾向が強まることで「情報に接しやすくなる」のに対し, ネガティブな感情は「不快」で回避傾向が強まり, 「自ら情報を切り離す状態」にした可能性がある。こうした要因により, 感情表現が異なることによって相手の存在感の認知に違いが示されたと考えられる。

3.5 総合的考察

今回は, 社会的スキルの側面から感情表現を伝えるテキストメッセージの理解に焦点を当て分析した。その結果, 受け手として相手のメッセージを理解する際と送り手として相手にメッセージを送る際において, 異なる傾向が示された。受け手の場合, 社会的スキルや社会的スキルの下位概念である問題解決・意思決定スキルにおいて上位群と下位群にメッセージの理解度に違いが見られた。その一方で, 相手に自分の書いたメッセージがどの程度理解されているかについては, 社会的スキルや社会的スキルの下位概念への影響が示されなかった。受け手の場合と送り手の場合の傾向の違いを検証するにあたっては, メッセージの理解の認知過程に着目する必要があると考えられる。受け手の場合, メッセージの理解は自己の理解に対する認知であるのに対し, 送り手の場合, 相手が自己のメッセージを理解しているかどうかの認知には, 他者からの評価や反応などの外的な手がかりが必要である。対面の場合は, 話し手(送り手)は聞き手(受け手)が目前にいることから, その反応を直接確認することが可能である。しかし, 今回採り上げた携帯電話を用いたテキストメッセージによるコミュニケーション場面では, 送り手は受け手の手がかりが欠如していたため, 妥当性の高い結果が得られなかった可能性がある。したがって, 送り手として相手が自己のメッセージを理解しているかの傾向を明らかとしていくためには, より多様な観点からの検証が必要と考えられる。

一方, 相手の存在感に関する認知においては, 能力の違いによる差は見られず, 喜びや楽しさというポジティブな感情が悲しみや怒りのネガティブな感情よりも相手の存在を強く認知する傾向が示された。Sproull and Kiesler(1991)が指摘するように, 相手の存在感(社会的存在感)の欠如はフレーミングが起りやすくなる要因として考えられるが, 石川・平田(2008)の結果をはじめ, 今回の結果においても, 携帯電話を用いたメールでのコミュニケーション場面において相手の存在感は認知されている。さらに, 感情表現の種類によって, その存在感の強さは異なることも明らかとされた。今回は社会的スキルの違いによって相手の存在感の認知は影響を及ぼさない結果が示されたが, 石川・平田(2011)では, 感情や気持ちを伝えるメッセージにおいて相手の存在感の認知が社会的スキルの違いによって異なる傾向を示している。したがって, 今後もネット上のさまざまなコミュニケーション場面における相手の存在感の認知の傾向について, 社会的スキルに着目して検証していく必要があると考えられる。

今回の結果は, 情報モラル教育において一つの指針となり得る可能性があると考えられる。仮に, テキストメッセージの内容の理解が不十分で, 意思疎通がうまくいかず, トラブルに発展するケースは, 社会的スキルを高めることで, 受け手として相手のメッセージをより正確に理解することにより, 回避しやすくなる可能性が考えられる。また, 相手の存在感の認知が感情表現により異なることをあらかじめ知っておくことで, 送り手と受け手双方でより冷静に判断しやすくなる可能性があると考えられる。ただし, 今回は大学生を対象とした結果であることから, 小・中学校における情報モラル教育の実践に有用な知見を得るためには, 小学生, 中学生を対象として検証していく必要があると考えられる。

4. おわりに

本研究では、テキストメッセージによるコミュニケーション場面において、喜怒哀楽という感情表現がどのように理解されるのか、またそれぞれの感情表現での相手の存在感の認知について検証した。とりわけ、送り手と受け手、社会的スキルの側面からその特徴を明らかとすることを目的とした。

受け手として相手の感情表現を含むメッセージに対する理解は、社会的スキルの側面に着目すると、社会的スキルおよび下位概念の問題解決・意思決定スキルにおいてスキルの高い者の方が、低い者よりもメッセージを理解している傾向が示された。感情表現間の側面に着目すると、ポジティブな感情表現の方がネガティブな感情表現よりも理解している傾向が高いことが示された。一方、送り手として相手に自分の書いたメッセージがどの程度理解されているかについては、社会的スキルの側面においては、有意な傾向は示されなかった。感情表現間の側面に着目すると、ポジティブな感情表現の方がネガティブな感情表現よりも理解している傾向が高いことが示された。

相手の存在感の認知について検証したところ、社会的スキルおよび社会的スキルの下位概念の違いによる差は見られなかった。どのスキル水準においても、喜びや楽しさの感情が悲しみや怒りの感情よりも相手の存在が強いという同様の傾向が示された。

以上の結果より、テキストメッセージにおいて、メッセージ内容が感情表現であった場合、ポジティブな感情表現であるか、ネガティブな感情表現であるかの違いによって、その内容の理解や相手の存在感の認知が異なる傾向が示された。ネット上でのコミュニケーションの当事者が、このような傾向を知り、配慮することで、より良好なコミュニケーションを行うことができると考えられる。ネット上でのコミュニケーションが一般的であることから、今回明らかとされた傾向は重要な知見と考えられる。

参考文献

- 千葉京子・相川 充 (2000) 看護における社会的スキル尺度の構成, 看護研究, 33(2), 53-62.
- 石川 真 (2011) 受け手と送り手に着目したテキストメッセージの伝達情報に関する研究, 上越教育大学研究紀要, 30, 1-9.
- 石川 真・平田乃美 (2008) 携帯電話を利用したテキストメッセージによるコミュニケーションに関する研究, 日本社会心理学会第49回大会発表論文集, 624-625.
- 石川 真・平田乃美 (2011) 感情や気持ちを伝えるメッセージの送受信者における相手の存在感, 日本社会心理学会第52回大会発表論文集, 268.
- 菊池章夫 (1988) 思いやりを科学する, 川島書店.
- 菊池章夫 (2004) KiSS-18研究ノート, 岩手県立大学社会福祉学部紀要, 6(2), 41-51.
- 小林哲生・天野成昭・正高信男 (2007) モバイル社会の現状と行方, NTT出版.
- 文部科学省国立教育政策研究所 (2011) 情報モラル教育実践ガイダンス, 国立教育政策研究所教育課程研究センター.
- Russell, J. A. and Bullock, M. (1985) Multidimensional scaling of emotional facial expressions: Similarity from preschoolers to adults, *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 1290-1298.
- 佐藤 信 (2008) 統計的官能検査法, 日科技連.
- Schlosberg, H. (1954) Three dimensions of emotion. *Psychological Review*, 61, 81-88.
- 篠原一光・三浦麻子 (1999) WWW掲示板を用いた電子コミュニティ形成過程に関する研究, *社会心理学研究*, 14(3), 144-154.
- Smith, C. A. and Ellsworth, P. C. (1985) Patterns of cognitive appraisal in emotion, *Journal of Personality and Social Psychology*, 48, 413-438.
- 総務省 (2011) 『平成23年版 情報通信白書ー共生型ネット社会の実現に向けてー』ぎょうせい.
- Sproull, L. and Kiesler, S. (1991) *Connections: New Ways of Working in the Networked Organization*, MIT Press.
- 若月隆雄・石川 真 (2006) ネットワークコミュニケーション能力育成学習プログラムの開発, 日本教育工学会第22回全国大会講演論文集, 849-850.

付 記

本研究は、平成19-21年度科学研究費補助金(若手研究(B))「テキストコミュニケーションを円滑にする感性情報に関する基礎的研究(課題番号19700237)」の助成を受けて行ったものである。

A study of characteristics of the text message to convey expressions of emotion

Makoto ISHIKAWA*

ABSTRACT

The purpose of this study was to clarify the cognitive characteristics of the expressions of emotion about the sender and receiver in a text message using the mobile phone. Especially, it was focused on whether understanding of messages and cognition of social presence were influenced on social skills. The categories employed in expressions of emotion were as follows: joy, anger, sadness, and happiness.

Three main constituent units of social skills were obtained by factor analysis. This three constituent units and social skill were analyzed as independent variables in this study. Each variable was divided into high or low skill group according to variables mean score. Firstly, understanding of messages on the receiver was analyzed, and it was found that high group in social skill and one of constituent units (problem-solving skill) were higher understanding of text message content than low one. The expressions of emotion Positive expressions of emotion messages were higher than negative. Secondly, understanding of messages on the sender was analyzed, and a difference between high and low skill group was not significant. The expressions of emotion Positive expressions of emotion messages were higher than negative in this case, too. Finally, recognition of social presence on the receiver and sender was analyzed, and it was found that recognition of social presence in positive expressions of emotion messages was higher than in negative. A difference between high and low skill group was not significant.

* School Education